

## それはホンモノですか？—テレビと道德教育—

奈良県道德教育振興会議委員

毎日新聞社奈良支局長 氷置 恒夫

我が家にテレビが来たのは、確か東京オリンピックの2、3年前だった。僕はまだ、幼稚園にも行っていなかった。真空管だったので、スイッチをONしてから画像が映ってくるまで、随分と時間がかかる。もちろん白黒テレビで、脚が4本あり、チャンネルを回すとガチャガチャと音がした。小学校、中学校と成長するにつれ、番組の選択権が少しずつ僕にも回ってきたが、「夜の7時半からコレが見たい。」などと両親に頼むと、それまでに、手伝いから宿題からお風呂まで済まして、テレビの前に「7時半からは先約や！」と主張するように、デーンと座って身構えておかねばならなかった。

今、そんな時代はとうに過ぎ去り、見たい番組は予約録画で見たいときにいつでも見ることができる。僕もこの便利さを当然のように甘受している。でも、テレビはこんなに進歩し、茶の間の大家族は核家族化しても、映像からは絶対に伝わらないものがある。

それは、におい、味、温度、痛みなどの「皮膚感覚」だ。雪の映像を見れば寒いと脳は感じるが、見ている自分の横には温かいコーヒーや熱燗あつかんがある。パソコンの液晶画面だってそうだが、しょせん、ホンモノではないということだ。

スマトラ沖の大地震による津波の被害が、迫力ある映像で伝わってくる。スゴイと感じる。だが、ゴロゴロと横たわる遺体から発せられる死臭と汗ばむ熱さが伝わっているか？ みんながマスクをしている理由が子どもたちに伝わっているか。ノーだ。阪神大震災でがれきの街を歩いたときのあの寒さとほこりとおい。ホンモノの体験というのもテレビじゃできない。ましてや、ネットやゲームでやっていることは、痛みもかゆみもない仮想体験に過ぎない。

現代社会は、仮想現実の洪水にさらされている。大人だって、それに惑わされるのに、子どもはなおさらだ。生老病死の喜びと悲しみ、人の心の痛み、そして自然の偉大さを理解させることが道德教育の三つの基本と僕は考えるが、大事なことは、せっかくの子ども物の感受性を、仮想現実の洪水の中で鈍らせてしまわない教育としつけだと思う。

